

叢書刊行にあたって

山路 憲 夫

本書は、白梅学園大学（東京都小平市）に二〇一六年末に設立した「白梅学園大学小平学・まちづくり研究所」が一年余にわたって開催した六回の研究会、二回の市民向け公開シンポジウムの取り組みの成果をまとめたものである（研究会、シンポの概要は本書末尾の「報告と資料」に掲載）。

1 「小平学」からまちづくりへ

「小平学・まちづくり研究所を作りませんか」。白梅学園大学（東京都小平市）の理事長でもある小松隆二先生から声をかけられたのは二〇一六年後期の授業が始まって間もない九月頃だった。一般には「小平学」というなじみのない言葉ではあるが、先生の思いは私にもよくわかった。

小平市は総面積二〇・四六km²、地理的には東京都のほぼ中央にあり、都心に通う勤め人が多い。

東京都多摩地区のベッドタウンの一つではあるが、旧石器時代の遺跡が数多く発掘され、江戸時代には玉川上水の開削により急速に新田開発が進み、農業に従事する人口も増えた。戦後はベッドタウンとして人口流入が続き、人口は一九万人を超えたが高齢化も進む。家族や雇用のあり方が大きく変容し、かつて地域で果たしていた支えあいの絆が弱体化した。道路が狭く、安心して地域で住み続けられる生活基盤が立ち遅れ、既存の医療や介護のサービスでは増え続けるニーズに対応できない。老いも若きも子ども住みやすいまちづくりが小平にもいま、求められている。

そのためには「小平」という地域の歴史、現状、課題、さらに文化、教育、環境、医療・介護・福祉・住まい、住民の意識といった多角的な観点からの分析を進め、まちづくりに資する取り組みにつなげられないか。その思いである。

小松先生は慶應義塾大学経済学部教授当時から社会、地域に資する公益学を提唱、自ら中心になって学会を設立、日本で初めて公益学を教育、研究する東北公益文科大学を二〇〇一年に創設、その学長を八年間務めた公益学の先駆者である。一九九〇年代末に白梅学園理事長に就任されてからも、公益学をさらに具体化し、地域に応じたまちづくりを進めるために地域学としての小平学の役割、必要性を訴え続けられてきた。

筆者も小松先生らが設立された現代公益学会にも参画、所属する白梅学園大学では六年余、白梅学園大学教育・福祉研究センター長として、市民向けの公開講座の開催や大学生と市民活動団体との出会いの場づくり、東村山市の子育て広場「ころころの森」の開設などに関わり、市民団体や自治体と協働して地域連携を模索してきた。

同時に、大学のある小平市でも二〇〇一二年から二〇一六年三月末まで市介護保険運営協議会の会長を四年間務め、近隣の東村山市、国立市、小金井市の介護保険運営協議会、地域包括ケア推進協議会や研究会などで地域包括ケアを進める立場から、この一〇年余、実践的にも研究者としても関わってきた。研究者となるまでの一九九〇年代末から二〇〇三年にかけて、毎日新聞論説委員として医療、介護を中心とした社会保障問題を担当、以来二〇年余、厚生労働省による制度改革を検証してきた。その一人として見ると、二〇二五年に向けて厚生労働省が進めてきた地域包括ケアの構築は、人類が経験したことがない未曾有の少子高齢社会を乗り切るための方策として、避けられない方向ではあった。とはいえ、それを実現するための具体的方策、内容が未成熟のまま市町村に委ねられ、今もさまざまな課題を抱える。

具体的には医療、介護だけではなく地域の専門職による多職種連携に加え、地域住民の参画による生活支援サービス、見守りや配食、軽度者に対する訪問介護、居場所づくりといった地域支援事業を地域の実情に応じた支えあいの仕組みを作り上げていくというのが地域包括ケアの大きな柱に据えられたが、制度や法律に基づき、行政によるサービスを進めてきた自治体にとって、法律や制度の十分な裏付けのない、専門職による医療と介護の連携やインフォーマルサポートとしての住民の参画を市町村が組織するのはなかなか難しい。市町村が規範的統合（筒井孝子・兵庫県立大学教授）として、実効性のあるまちづくりとしての地域包括ケアを進めていくためには、単独の部や課ではなく、縦割りを超えた全庁的な体制を組むことが不可欠である。そのためには市町村の首長が強力なリーダーシップを持つて進めること、行政自身が従来のを超えて、地域の特性、実情に応

じて専門職や住民との連携を持って進めることが求められる。ただ、行政だけでは限界もある。

その根拠づくり、具体的な方策を示すための手助けを大学（あるいは研究所やシンクタンク）が担う役割も求められている。

例えば、地域住民と一口に言ってもさまざまである。小平市で言えば、江戸時代に玉川上水や小川用水の建設に沿ってまちづくりが進められてきた歴史があり、そこに住み着いた旧住民は通勤族として近年住民となった新住民とは意識も行動様式も異なる。地域包括ケアを小平市で進めていく場合、地域の特性を明らかにすることは不可欠である。

2 地域包括ケア関連と「歴史・環境・文化」の二本立て

全国の、小平市のさまざまな動きを見据え、以下のような形で小平学・まちづくり研究所は概ね二つの柱で研究会、シンポジウム等の活動を進めてきた。

その一つはすでに述べたように、地域包括ケアに関する医療、介護、福祉である。もう一つは、環境や自然、歴史、文化など小平に関するすべての問題、すなわち「総合知としてのまちづくり」を柱に据えた。

本書はそうした柱でこの一年間開いた研究会、シンポジウムの成果をまとめたものである。

このうち「先進事例に学ぶ——生活支援と住民の力」「人生の最終段階をどう迎えますか——小平市の在宅看取り現場から考える」という二回にわたる市民公開シンポジウムは参加した市民から

も高く評価され、できるだけくわしく再録した。

研究会講師として参加していただいた方々には、研究会での講演内容をさらにくわしく、改めて寄稿していただいた。さらに研究会講師としてはまだ出席を頂いていないが、二〇二〇年度から始まる小平市第四期長期総合計画の策定に取り組みつつある小平市役所の政策課の担当者、さらにコミュニティ・ソーシャルワーカー（CSW）として地域の課題解決に取り組む小平市社会福祉協議会の上原哲子さんにも寄稿を頂いた。

「総合知としてのまちづくり」を目指す小平学の構築は緒についたばかりではあるが、何とかまとめることができた。

これを足掛りに地域学としての小平学の充実、浄化をさらに深めていきたい。

小平学・まちづくり研究のフロンティア 目次

叢書刊行にあたって……………山路憲夫 2

1 「小平学」からまちづくりへ 2 地域包括ケア関連と「歴史・環境・文化」の二本立て

第一章 小平学とまちづくりの目ざすもの

1 小平学の生成とまちづくり……………小松隆二 14

——まちづくり・地域学への挑戦の時代

1 まちづくりと地域学の出発 2 小平学の必要性 3 まちづくりと小平学の誕生——研究
のあり方・方法の革新 4 小平というまち・住民・個性——小平学の研究対象 むすび

2 『小平市史』の意義と役割……………蛭田廣一 35

——市史を編さんして

1 小平市史編さんの位置付け 2 小平市立図書館における地域資料サービス 3 小平市史
編さん基本方針 4 小平市史編さん事業における調査実績 5 多摩地域の市町村史等発行状

況	6	小平市史編さんの特色	7	新しい市史編さんの課題	8	概要版の作成	9	ま
とめ								

3	小平市を取り巻く現状と将来像について	53
	小平市企画政策部政策課	53

第二章 小平市における共生と共創

1	小平市の地域包括ケアの現状と課題	58
	星野眞由美	58

——住み慣れた小平で、いきいきと笑顔で暮らせる地域社会をめざして

はじめに	「地域包括ケアシステムとは」	1	人口等からみた今後の小平市の状況	2	小平市のサービス等の状況	3	認知症について	4	在宅医療と介護の連携について	5	おわりに	
------	----------------	---	------------------	---	--------------	---	---------	---	----------------	---	------	--

2	小平市在宅における医療と介護の連携について	72
	鈴木道明	72

——小平市在宅医療介護連携推進協議会と、ひまわり在宅ネットワークの活動と、そして、日々の在宅診療から見えること

はじめに	1	在宅療養における医療と介護	2	疾患毎の経過モデル	3	在宅ケアに関わる職種	4	小平すずきクリニックではどうしているか	5	訪問看護師の役割（週一〜三回程	
------	---	---------------	---	-----------	---	------------	---	---------------------	---	-----------------	--

度訪問) 6 訪問薬剤師について (薬の配達以外の自宅での支援内容) 7 小平市在宅医療介護連携推進協議会について 8 ひまわり在宅ネットワーク(ひまネット)について 9 これからの在宅医療、在宅ケア、在宅療養の課題——この地域でどう見ていくか

3 「だれでもワークショップ」心理的拠点と伴走のワークショップ……杉山貴洋 92

はじめに だれでもワークショップの誕生 だれでもワークショップの特徴 土曜造形ワークショップの事例から

第三章 小平市の文化、教育、環境、まちづくり

1 小平市の図書館活動……蛭田廣一 104

1 初期(一〇〇年)の事業展開とネットワークの形成 2 図書館総合管理システムの開発
3 充実期(一〇〇二五年)の事業展開 4 改革期(二五年)の事業展開 5 今後の課題と将来展望

2 白梅学園大学・短期大学の地域活動……瀧口優 137

——小平西地区地域ネットワークを中心に

はじめに 1 「西ネット」の地域はどこか 2 世話人会 3 懇談会とテーマ 4 情報

紙「小平西のきずな」の発行 5 各ブロック等の特徴 6 六年間を振り返って——成果と課題 7 今後の展望 終わりに

3 玉川上水の過去・現在・未来……………鈴木利博 156

はじめに 1 玉川上水・分水網の特徴 2 玉川上水からの分水網 3 玉川上水と野火止用水と小平 4 「玉川上水・分水網保全活用プロジェクト」の活動 5 江戸と小平と水 6 「玉川上水ネット」の保全活動の動きと二〇一七年までに見えてきたもの 7 こだいらの将来を考える

第四章 小平市の支え合いの地域づくり活動

1 小平市自治基本条例の検証と課題……………福井正徳 184

1 小平市長選挙が行われた平成一七年当時の日本が置かれていた社会経済状況と「小平市第三次長期総合計画」及び「行財政再構築プラン」の策定 2 「自治基本条例」制定の経緯 3 「自治基本条例」の概要 4 検証と課題

2 小平市における市民活動の役割……………細江卓朗 209

1 はじめに 2 市民活動の実態 3 市民活動の事例紹介 4 市民活動に参加する仕組み 5 市民活動を資金面で支える仕組み 6 新しい取り組み 7 まとめ

3 小平市社協CSW事業について……………上原哲子 226

——モデル地区を中心とした活動事例を通じて

- はじめに 1 事業概要 2 活動事例 3 成果及び課題 むすび

第五章 小平市は終の棲家になりうるか——二回のシンポジウムから

1 第二回シンポジウム「先進事例に学ぶ——生活支援と住民の力」

篠田浩・工藤絵里子・毛利悦子・星野眞由美・山路憲夫 246

住民主体の互助をどう進めるか NPOと社会福祉協議会が担い手に 介護支援ボランティアと
介護予防グループの広がり 介護保険前から支えあいの地域づくり 武蔵野市認定ヘルパー制度
を導入 小平での支えあい活動の広がり

2 第二回市民公開講座シンポジウム「人生の最終段階をどう迎えますか——東京都小平市の在宅看取り現場から考える」

山崎章郎・鈴木道明・新田國夫・山路憲夫他 276

多くが望む在宅看取り体制をどう作るか 専門的な在宅看取りを可能にする専門的チームを 医
師にも看取り研修を 治す医療ではなく支える医療を 住み慣れた家で最期をゆつくり迎えられ

た 地域に在宅看取りの文化を

《報告と資料》

293

1 白梅学園大学小平学・まちづくり研究所の概要

2 活動報告

(1) 設立までの経過

(2) 研究会、市民公開シンポジウム報告(二〇一七年二月～二〇一八年三月)

あとながき

山路憲夫

298

1 小平学の生成とまちづくり

——まちづくり・地域学への挑戦の時代

小松隆 二

1 まちづくりと地域学の出発

小平市などの市町村、それを超える都道府県、さらにはそれらをも超える東北などを広がりとする地域学が、二〇世紀の後半から今世紀にかけて、広く挑戦された。

それは、中央中心や全国・全体を優先する研究視点や手法に対し、一方で地域を基礎とするあり方、他方で市民本位のあり方へと軌道修正を図ることで、学問や研究のあり方に問題提起を行おうとするものであった。

研究の視点やあり方として、まず中央や全体に先行して関心が向けられると、地域・地方研究は少数のものが取り組むことになりがちであった。そのため、各地域には伝統、生活、文化、産業、

自然など個性的・特徴的なものがありながら、広く関心を集めることが少なかった。そのような点にも、地域学が必要とされた一因があった。

加えて、地域学は、伝統や文化であれ、自然や環境であれ、また経済や生活であれ、地域の実態に目を向け、深く切り込むので、市民生活の改善・向上にも資する目的意識も強く持つに至る。そのため、研究がより良いまち・より良い暮らしを追求し、実践する「まちづくり」と結びつくのは、自然の流れであった。

その点で、地域学は理念レベルでの、研究のための研究にとどまるのではなく、より良いまち・より良い暮らしを旨とすまちづくりに応える役割を強く担うことになった。

そのように、地域学という学問・研究の生成・拡大の大きな理由の一つは、全国の地域におけるより良いまち・暮らしを求めるまちづくりの生成であった。近年、各地に盛り上がりつつあるまちづくり運動も、またその一環でもある地域包括ケアの構想や実践なども、地域におけるより良い暮らしづくりの挑戦・具体化であり、地域学と密接に結びつくものであった。

そのようなまちづくりの進展と共に、地域研究は、従来とは違い、科学や理論に支えられた総合的な視点と方法に基づく研究となり、地域や住民からその研究成果の提供を期待されることにもなった。まちづくりに取り組む前に、あるいは取り組みつつ、地域の歴史・伝統、文化・宗教、生活、自然・環境・風土、さらに地域の特徴、個性、良さを学び、まちづくりに活かす必要があるからである。

周知のように、まちづくりは、自分や自分たちのための持家づくりを超えるところから出発する。

まちづくりになると、自分一個の目標、好み、考えて押し通すわけにはいかない。多くの市民が関わり・参加するだけに、その多くの住民が満足し、納得しあえるものでなくてはならない。その時には、一般市民も、より良いまちや暮らしの実現に向かう夢や目標を持つゆとりや可能性を認識したということである。

地域に住む市民は、長い間、自らの人生において家族を持ち、ついで自分たちの持家を構えることを夢見てきた。しかも、それが近年に至り、一般市民にも手の届く実現可能な目標になってきた。すると、次には持家ならなんでも良いという当初の目標を超えて、持家でも、より良い水準で、よりレベルの高い環境・景観の下で生活したい、と願うようになる。自分の家は気に入って満足できても、一歩外に出て道路に足を踏み出したら、電柱・電線だらけで、街路樹も歩道もない、狭く危険な道路が待ち受けている。それでは、良好な居住環境とは言えない。

その段階になると、自分の家を超えて周辺のこと、まち全体のことも視野・視界に入れるようになる。その自分の持家を超えるまちづくり・暮らしづくりを視野に入れて対応する時こそ、まちづくりの始まりである。また地域学の必要が認識され、その出発・構築に挑戦するときでもある。

そこに至るまでを振り返ってみても、人々は、生活の向上・安定を目指し、まず賃金の引上げ・改善に関心を示す。そのため労働運動も展開した。その段階では、自分の家を持つ持家などは遠い夢であった。日々生きることと精一杯であり、まず必要なことは、賃金の引上げなど労働条件の改善であった。

その結果、時間はかかるが、賃金の引上げをはじめとする労働諸条件の改善がかなり実現する。

それによって、生活の維持・改善が経済的にはある程度達成される。すると、次には持家を夢み出す。そのうち、自分の家を持ちたいという夢が、ささやかな家ながら、ローンを使って実現可能になる。しかも、それが一般化する。

すると、単に持家であれば、なんでもよいということではなく、次にはより良い住居、より良いまちに住むことを夢見るようになる。そこで、自分の家・自分の庭を超えてまち・地域が視界に入ってくる。まちづくりの必要性の認識と出発である。同時に、その土台づくりや前進のために、地域・まちを総合的に研究・解明する地域学による支援の必要も認識されるようになる。

2 小平学の必要性

ところが、そのまちづくりの段階に至って、市民たちは、日本にはまちづくりに取り組むには厳しく不利な条件が待ち受けていることに気づく。日本でも、どのまちにも、まちづくりに必要な、ある程度の条件は整っている。歴史や伝統も、また特徴や個性も必ずある。ただ、その時代の平均的な暮しレベルの人たちが、欧米なら普通に住める程度広く、環境も良好な住宅からなる地域・まちには容易には住めない事態になっていることに気づくのである。

実際に、国の住宅政策・道路政策の欠落から、多くのまちは、より良いまち・より良い暮らしを実現するまちづくりの土台・条件が整備されていない。むしろ、破壊されている。その典型が地価の高騰による土地の狭さと道路の後れである。どの地域にも、まちづくりに最も大切な緑とある程

度広く安全な道路・土地が不足している。道路の多くは、美観も安全も感じさせないまま、放置されている。また住宅も余りに狭い区画に分割されすぎている。欧米の普通の市民が住む住宅街では考えられない現実である。

また、日本の道路、特に住宅街周辺の通勤・通学路の多くは、道幅が狭く、街路樹も、歩道もない。その歩道も十分でない道路には、歩行者のみか、路線バスも、タクシーも、乗用車も、バイクも、自転車も、入り乱れて通る。歩行者は肩身の狭い気持と姿勢で安全が十分に確保されていない狭い道路の片隅を利用しなくてはならない。誰にとっても、快適さ以前に、安全・安心にも遠い道路になっている。住宅街でも、住宅・住民の安全・安心を守る歩道、街路樹、花などは無いに等しい道路が多い。

さらに、長年放置されたままの国の計画道路、毎年度くり返される予算消化の道路の補修工事などに見られるように、市民本位ではなく、むしろ市民の希望・要求に関係なく、官・行政本位の道路づくりが長く続いたが、それをしっかり改善・改革しようとする行政の姿勢が引き続くのである。

実際に、各地のまちづくりでは、基本となる道路や公園を安全なものに拡幅・拡大するだけでも大変難しい状態になっている。膨大な資金を用意しない限り、街路樹のある広い道路、贅沢とは遠く、ある程度の広さをもつ土地の確保さえ、到底無理なことに気づく。実際に、小平や近隣のまちを見ても、他の市町村に比べて比較的大きな家が目立つのに、平均的にはそのような狭い道路に囲まれた住宅街が、欧米の住宅街では考えられない狭さに区割りされている。

そこに至って、国の住宅・道路政策の欠落・後れに啞然とするが、どうにもならない。国のみか、自治体や経済界も、経済性・効率性・営利性の視点に立つ高速度路づくりや誘致には熱心なのに、市民の生活に関わる市街地・住宅地や道路の快適化、安全化にはほとんど関心がないかのような政策や姿勢であった。

それでも、少しでもより良いまちにと、漸く前世紀末から全国にわたってまちづくりの声・運動が生起し、取り組みが見られだした。ただし、少しずつ盛り上がってきたものの、容易には良い結果は得られなかった。

地域学の成立と広がりも、そのような現実に対する不満の対処療法・はけ口の一面、あるいはより良いまちづくりの欠落を補い、不満を少しでも解消することを期待する一面もあった。ひどい状態であるが、それを抛っておいては、より良いまち・より良い暮らしは永遠にやってこない。

それぞれのまちには、必ず特徴、個性、良さがあるので、せめてそういうものを調査、発掘、検証し、活用や発信をしよう、そのような研究面からのアプローチも、地域、そこでのまちづくり・暮らしづくりに貢献できるのではないかという意識が地域学の成立を歓迎することになったのである。

容易に欧米のような住宅・住宅街の夢が達成されなかったのは、日本に長い間市民本位の住宅政策、道路政策が欠落していたことが大きい。また市民にも、住まい・住宅街をより良くより安全安心な暮らしレベルにする強い自覚や執着、また権利意識が欠如していたことも大きい。さらに、より良い暮らしを追求するまちづくり運動も、それらを支え、カバーする小平学のような地域学も、存

在しないか、弱小であったことも関わっている。

小平市とその周辺にも、ようやく市民によるまちづくり、そして地域学として小平学が動き出した。特に白梅学園大学の「小平学・まちづくり研究所」が大学・学園関係者のみでなく、市民の協力・参加を得て、協働・共創のあり方を基本に動きだしたことが留意されてよい。大学関係者のみの研究所は、全国的にみれば、数かぎりないが、そのように特に大学と学外の市民の連携・協力で出発し、維持される研究所の例は少ないので、その出発と活動を歓迎したい。

3 まちづくりと小平学の誕生——研究のあり方・方法の革新

小平市に花開いた小平学と研究所

都下の小平市は無名に近いまちであるが、予想以上に興味をそそるまちである。人口一九万人弱、面積は二〇・四六平方キロメートル。そのまち全体が若干の高低はあるが東西に長く伸びた平野である。その東西の広がりを貫くように、東京に向かって玉川上水が流れ、あちこちで水路を枝別れさせている。それらの水路に沿う林道・雑木林・公園、それに橋・水門がまず住民や訪ねる人たちの心を和ませてくれる。

加えて、広大な平野を縦横に走る鎌倉街道、東京街道、青梅街道、府中街道、五日市街道、鈴木街道、小金井街道などの街道は、数百年あるいは千年を超える歳月に渡って、これらの街道を往き来した人たちのことにも思いを馳せたくなる歴史を実感させる。

3 玉川上水の過去・現在・未来

鈴木利博

はじめに

(1) 二〇一七年(平成二九)三月初旬のことであった。白梅学園の小松隆二理事長、山路憲夫教授より、「小平市とその周辺についても、地域学、小平学の視点で検証し直したい」と「小平学」立ち上げの構想を伺った。「緑のまち、水路のまち、街道のまち、大学・学術・図書のみち」と小平の特色を語るお二人の熱い思いに、賛同の拍手を送った。玉川上水と野火止用水に囲まれた地形と小平の歴史を知れば知るほど、「人間の生活がいかに自然や地形に関係するか、自然の違いにより人々の暮らしや考え方に違いが生じる」「郷土自体が人間を形成する教育力を持つ」と牧口常三郎(人生地理学)のいう人を育てる絶妙な位置にある「郷土」を「^①を検証したいと考え

ていたからである。

(2) 昭和三〇年代は高度経済成長の真つただ中で、東京湾や多摩川の水は工場からの排水で泡だらけ、隅田川は汚物の垂れ流しの時代だった。小平は東京のベッドタウンとして人口増加も激しく、近郊農業としての農地も雑木林も宅地化が進み、急速に変容した時期であった。(写真1-3)

一九六五年(昭和四〇)の淀橋浄水場の閉鎖により、玉川上水・分水網の周辺環境は大きく変化するが、市内分水網五〇kmは今も残り、武蔵野台地随一の水路網を持つ。小平市制五〇周年を前にする二〇〇九年一月(平成二一)、全一章三九条からなる小平市自治基本条例が施行した。

私たちのまち「こいだいら」は、武蔵野台地のほぼ中央に在り、江戸時代に玉川上水の開通による新田開発によって開け、水と緑豊かなまちになりました。今も玉川上水と野火止水に囲まれ、武蔵野の自然に恵まれた住宅都市であり、多くの大学を有する学園都市でもあります。

私たちは、先人が開き、長年培ってきたこのまちの緑豊かな環境や文化を守り、持続可能なまちをつくり、次世代に手渡したいと願います。(小平市自治基本条例前文より抜粋)

(3) 玉川上水からの水の恩恵あればこそ小平の今があることを実感する。各種歴史資料の収集、市内各分水路の調査、古老からの聞き取りを重ねると、歴史・文化と人々のなりわい等が見えてくる。時代の波を越え、玉川上水の水と緑の回廊・風の道を守り残した人々に敬意を表したい。



小平市玉川上水を守る会
庄司徳治氏提供

(写真1) 昭和30年代の玉川上水（満水）



(写真2) 青梅街道⁽²⁾



(写真3) 小平の風景

「景観一〇年、風景一〇〇年、風土一〇〇〇年」といわれる。今ある武蔵野の自然の一角が厳然とあるということの意味を再認識したい。小平の将来像を考える時、この五〇kmもの分水網こそ「持続可能なまち こだいら」の基軸として、子供たちのために守り伝えたいとの思いを強くしたのは私一人だけではない。江戸期の玉川上水開削から三六〇有余年の「歴史と文化のまち 郷土こだいら」への出発としたいと思う。

1 玉川上水・分水網の特徴

玉川上水・分水網を広域に捉え、まず玉川上水・分水網の特徴について整理しておきたい。

①優れた歴史的土木遺産

・近世の優れた水利技術による、多摩川の羽村取水口から四谷大木戸までの四三kmに及ぶ素堀で自然流下の上水道。(一六五三年(承応二)開削)

・羽村取水口〜浅間橋間(三〇km)が長大な素堀の開削が今も残される。その部分が二〇〇三年(平成一五) 国の文化財(東京の発展を支えた歴史的価値を有する土木施設・遺構)に指定された。

②近世水道施設として江戸・東京発展への役割

・江戸市民の命の水を供給(飲料水、防火用水、園池用水、江戸城濠用水)する多目的な機能を有

工藤絵里子（くどう・えりこ）

1993年稲城市役所入庁。稲城市福祉部高齢福祉課介護保険係主任・係長、高齢福祉課高齢福祉係長を経て、2015年より稲城市福祉部高齢福祉課長。

毛利悦子（もうり・えつこ）

1992年武蔵野市役所入庁。市民コミュニティ文化課、福祉保健部サービス課障害、高齢者在宅サービス、武蔵野市社会福祉協議会ら派遣、同介護保険係長、高齢福祉課高齢福祉係長を経て、2015年より健康福祉部高齢者支援課相談支援担当課長。2018年から生活福祉課長。

山崎章郎（やまざき・ふみお）

1947年福島県生まれ。1975年千葉大学卒業、同大学病院第一外科、1984年より千葉県八日市場市（現匝瑳市）市民病院消化器科医長、1991年より聖ヨハネ会桜町病院ホスピス科部長、2005年に在宅緩和ケア専門診療所ケアタウン小平クリニック開設（2016年4月より「在宅緩和ケア充実診療所」）。主な著書に『病院で死ぬということ 正・続』（文春文庫）、『病院で死ぬのはもったいない』（共著、春秋社）、『市民ホスピスへの道』（共著、春秋社）など。

新田國夫（にった・くにお）

1944年岐阜市生まれ、1967年早稲田大学第一商学部卒業、1979年帝京大学医学部卒業後、帝京大学病院第一外科・救急救命センターなどを経て、1990年東京都国立市に新田クリニック開設、在宅医療を開始。1992年医療法人社団つくし会設立 理事長に就任し現在に至る。全国在宅療養支援診療所連絡会会長、日本臨床倫理学会理事長、福祉フォーラム・東北会長、福祉フォーラム・ジャパン副会長、日本在宅ケアアライアンス議長。

福井正徳（ふくい・まさのり）

1943年生まれ。東京大学法学部卒、大手総合商社法務部門で主に海外取引に係る契約の作成・訴訟等に関する業務を担当、その後メーカーで主に、総務・人事・法務を担当。小平市民生委員・児童委員、NPO法人小平市民活動ネットワーク理事、「小平市民活動支援センター」・センター長、「小平市行財政再構築法方針検討委員会」委員、「自治基本条例つくる市民の会議」：情報公開・参加・協働など市民の権利義務に関する部会長。

細江卓朗（ほそえ・たくろう）

1948年滋賀県生まれ。立命館大学理工学部卒業後、日立製作所系列会社で半導体・液晶の製造・検査設備の開発などに従事し2009年退職。東日本大震災発災に伴い、「災害ボランティアネットワークチーム小平」を有志で立ち上げ被災地支援、福島の子どもの保養プロジェクト継続中。地域活動では、2013年白梅学園大学と協働で地域の居場所「コミュニティサロンほっとスペースさつき」開所。障がい者も健常者も一緒に楽しむ「みんなでつくる音楽祭 in 小平」2013年12月に第1回開催、第3回まで実行委員長を務める。学校法人白梅学園理事、社会福祉法人つむぎ理事、小平市生活支援体制整備事業協議会副会長、小平市協働事業選考審査会委員。

上原哲子（うえはら・あきこ）

1974年生まれ。大学卒業後、社会福祉法人小平市社会福祉協議会に入職。あおぞら福祉センター及びたいよう福祉センターにおいて、知的・身体障がい者の介護業務、ボランティアセンターで、ボランティアコーディネーターとして市内外のボランティア・市民活動団体及び住民主体の地域福祉活動の相談支援に従事。2017年4月から地域福祉推進課こだいら生活相談支援センターCSW（コミュニティソーシャルワーカー）担当。社会福祉士。

篠田浩（しのだ・ひろし）

1989年大垣市役所入庁。老人福祉課、高齢福祉課、介護保険課、高齢介護課、社会福祉課で勤務。2012年、厚生労働省老健局総務課課長補佐。2014年、大垣市役所福祉部介護保険専門官を経て、2015年より大垣市役所福祉部高齢介護課長。

鈴木道明（すずき・みちあき）

1990年秋田大学医学部を卒業し、公立昭和病院呼吸器内科等に勤務。2008年からケアタウン小平クリニック（訪問診療）勤務。2014年6月、小平すずきクリニック開業（院長）。日本在宅医学会、日本在宅医療学会、日本緩和医療学会、日本プライマリ・ケア連合学会等に所属。一般社団法人小平市医師会理事（在宅医療担当）、小平市在宅医療介護連携推進協議会委員長、小平市介護認定審査会委員。ひまわり在宅ネットワーク（北多摩北部地域の在宅医療介護ネットワーク）世話人代表。

杉山貴洋（すぎやま・たかひろ）

1969年生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業後、同学科助手、講師を経て、2005年に白梅学園大学専任講師となり、2018年から白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授。武蔵野美術大学教職課程研究室講師。社会福祉法人東京児童協会おきなおうち造形ワークショップ講師。主な著書に『造形ワークショップ入門』『特別支援教育とアート』（武蔵野美術大学出版局）など。2008年、2010年、2011年、2013年キッズデザイン賞受賞。第49回富田博之記念賞受賞。第7回こども環境学会活動賞受賞。

瀧口優（たきぐち・まさる）

1951年生まれ。和光大学大学院社会文化総合学科。白梅学園短期大学教授。2016年、白梅学園大学地域交流研究センター長。『ことばと教育の創造』（共著 三学出版 2017）、「顔の見える地域連携を目指して－『白梅子育て広場』と『小平西地区地域ネットワーク』の経験から」（『地域と教育』31号、2016）、「小平市における多文化共生の課題と提言」（白梅学園大学短期大学教育・福祉研究センター年報 NO.18、2013）

鈴木利博（すずき・としひろ）

1941年生まれ。東京教育大学大学院農学研究科中退。創価学園創価中学校長、日本生物教育会副会長等を経て現在、学び舎江戸東京ユネスコクラブ（水と緑・環境委員長）、玉川上水ネット事務局長、東京生物クラブ連盟顧問。主な研究活動に「自然観察路の研究」（日本生物教育会会長賞中路賞受賞、1979、共同）、「玉川上水・分水網を世界遺産・未来遺産へ」（2015）、「多摩から江戸・東京をつなぐ水循環の保全再生」（2017）ほか。

† 執筆者紹介（執筆順）

山路憲夫（やまじ・のりお）

1946年生まれ。1970年慶大経済学部卒業後、毎日新聞社社会部記者、論説委員（社会保障・労働担当）を経て、2003年より白梅学園大学教授。2017年4月から白梅学園大学名誉教授、白梅学園大学小平学・まちづくり研究所所長。東村山市地域包括ケア推進協議会会長など兼務。主な著作に「地域での看取り体制をどう作るのか」（『月刊都市問題』2017年7月号）、『医療保険がつぶれる』（2000年、法研）など。

小松隆二（こまつ・りゅうじ）

1938年生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了、経済学博士。〔現・所属〕慶應義塾大学名誉教授、白梅学園理事長。〔主要著作〕『企業別組合の生成』（御茶の水書房）、『社会政策論』（青林書院）、『難民の時代』（学文社）、『大正自由人物話』（岩波書店）、『公益とまちづくり文化』（慶應義塾大学出版会）、『公益の種を蒔いた人びと』（東北出版企画）、『戦争は犯罪である—加藤哲太郎の生涯と思想—』（春秋社）、『理想郷の子供たち—ニュージーランドの児童福祉—』『現代社会政策論』『ニュージーランド社会誌』『公益とは何か』『新潟が生んだ七人の思想家たち』（以上、論創社）他。

蛭田廣一（ひるた・ひろかず）

1951年福島県生まれ。1975年青山学院大学卒業。松本大学・実践女子大学非常勤講師。1975年より小平市立図書館司書、2005年より小平市中央図書館館長、2008年～2015年3月小平市企画政策部参事（市史編さん）、主な著作（共著）に『地域資料入門』（日本図書館協会）、『資料保存の調査と計画』（日本図書館協会）、『現在を生きる地域資料』（けやき出版）など。

星野眞由美（ほしの・まゆみ）

小平市健康福祉部高齢者支援課課長補佐。平成5年4月、稲城市役所入庁。平成19年4月、稲城市福祉部高齢福祉課介護保険係主任。平成21年4月、同介護保険係長。平成25年4月、高齢福祉課高齢福祉係長。平成27年10月より現職。

地域学叢書①

小平学・まちづくり研究のフロンティア

2018年10月20日 初版第1刷印刷

2018年10月30日 初版第1刷発行

編者 白梅学園大学小平学・まちづくり研究所

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 奥定泰之

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1749-1 ©2018 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。